
俺は前世男子だった！？ 01

mshミクネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は前世男子だった！？ 01

【Nコード】

N1034Z

【作者名】

mshミクネギ

【あらすじ】

なぜか前世の記憶をもったまま生まれきた少女、かみかわあいか神川愛華。しかし、その前世の記憶というのはなんと騎士であり、なんと男性の記憶なのだった。そんな不思議少女（？）神川愛華の愉快な日常風景を描いた作品。

同人活動のようなもので同じ作品を載せています。

「……っ！……っ！……っ！」

誰かが俺の名前を呼び続ける。

体が痛い…、動くことができない。口の中は血の味がする。
まあ、こんな俺にはお似合いの終わり方だな。

「……っ！……っ！……っ！」

そう呼び続けなくてくれ、俺はもう眠たいんだ。
最期くらいゆっくりさせてくれよ。

これでも結構満足してるんだぜ？
お前と過ごせたおかげで俺はとても幸せだったんだ。

だから、だからさ、そう泣きそうな顔をしないでくれよ。

そうだ、俺はあの時、確かに死んだはずなんだ。

「はあ、なんでこんなになったかねえ…」

季節は夏、時刻は16時ちょっと。

俺は体育館裏に呼び出されていた。

世にいう告白だ。

しかし、俺がお付き合いなど当然するわけがない。
なぜなら相手は、男だから。

ん？まで、違うぞ。俺は断じてBLなどというものではないぞ。
俺が男から告白されている理由は、その、俺はなぜか女子の体つきをしているんだ。

はははは、今俺を変態だと思ったやつ、前にでろ。斬り殺す。
俺だって不思議にも思うさ。

けれどな、こっちはもう16年もこの体と付き合っているんだ。
いい加減諦めもついたし、あまりそのことは考えないようにしているんだが…

困ったことに俺は男子たちにどういうわけかモテる。

…いやまあね、原因は分かっているんだ。

自分のことをこういうのは何か気が引けるのだが、俺は外見的には大変可愛いから。それがモテる原因。

目鼻はしっかり整っており、サラサラとした肩まである黒い髪、身長は高すぎず、低すぎずで全身のプロポーション的にはすらりとしながらでる所はそれなりにでているいいスタイルだ。

よく自分をそんな風に判断できるなだって？

当たり前だ、見た目はこれでも俺は立派な男子だ。

見る対象が女子ならばこのくらい冷静に分析もできるさ。

いや、正確には俺は女子なのかもな。

だが、どうやら俺には前世の記憶があるようなんだ。

そう、つい先日のことのように思い出せる。

俺は元騎士だった。

そして確か寝ている所を敵に襲われて…それで…

女子に生まれ変わってきた。

これが輪廻転生りんねてんせいってもんか。

あれ、俺キリスト教なんだがなー…

思えばこの16年間はとても辛かった。

生まれた途端に「オギャー」ではなく「Where am I？」などと発音した時今の親は驚いていたな。

まあ、あの頃は声帯も発達していなかったしあまり喋れなかったが、2年でしっかり日本語も喋れるようになった。

他には俺より実質年下のくせに威張りちらしている教師の授業時間違いを指摘しまくったら怒られたりもした。

思い出話をしようと思えばいくらでもあるが今は筋力も鍛え、前世ほどではないが剣術もできるようになった。前世の頃の時代とは違う現代にもそこそこ適応できてきた、かな。

それでもやはり男子に告白されるのだけは慣れない。

元々男子だっただけに相手の気持ちも決意もひしひしと伝わってくるのだが、生理的にうけつけられない。

「ごめん、俺はお前とつき合えない。」

だからいつも断る。

でも、生理的にやだと言っているのにこの胸がドキドキするのはなぜだろう？

まあ、少なからずこの前世の記憶がなければ俺は列記とした女子だったという証明なのかもしれない。

交際を断られた男子は悲しそうにさっていき、俺はカバンをとり教室へと戻ることにした。

教室へ入ると現世では小学生時代からの付き合いで仲のいい女子、まえだみき前田美紀がこちらをみてニヤニヤと話しかけてきた。

「また告白う〜？」

大変ウザい。

「ああ、そうだ。モテるのも度が違えば困りものだな。」

「リア充爆発しろおっ!!」

その美紀の叫び声で放課後、教室に残っていたやつらの鋭い目が一瞬こちらを突き刺した気がする。気のせいでありますように…

しかしそんなことを言いながら、俺は美紀も充分可愛い女子だと思う。

ショートカットで少し茶色がかった髪の毛、身長はやや低め、体格もやや控えめで顔は彼女の性格を投影しているかのように天真爛漫な美少女そのものだ。まん

「ま、いいや。とりあえず帰ろー。」

こんな軽いノリも彼女の魅力だろう。

ちなみに、こいつは俺の秘密を知っている。

現世の両親を除いたら秘密を知っているのはこいつだけだ。

つまり俺が前世男であり騎士であったことも知っている。

そんなわけで現世に適応しきれずあたふたしていた俺を美紀は助けてきてくれた。

生きた年月なら俺の方が上だというのに情けない限りだ。

「ところでさ、入る部活決まった？」

帰り道、美紀はそんなことをきいてきた。

俺たちは今年から高校1年生、だからまずは入る部活を考えるのに必死なのだ。

「うーん、剣道部、かな？あゝ、でも部員が弱かったら面白くないしな…」

去年、俺は剣道部だったのだが部員がみんなあまりにも弱すぎて退部した経験がある。

それからずるずると…帰宅部だった…

「部員が弱いのではなくあんたが強すぎるんだと言ってあげたいのは私だけ!？」

隣で美紀が騒ぐ。

「いや、あいつらは弱い。あんなだと弓に射られるのがオチだな。」

「弓兵と戦う剣道部ってどうよ!？」

「あ、そっぴゃ現代では弓の代わりに銃というのが普及しているのだったな。」

「銃とも戦わねーし!! てか普及してねえ! ここは日本だっ!!」
むう、やはりいまいち剣道というのは分らん。ルールは中学の時に覚えたが実戦で役にたつのかどうかはかなり疑問だ。

「でも、うちの学校の剣道部部长さんは強いってきいたし、とりあえず、見に行くだけ行ってみたら？」

じゃあね。と、分かれ道で手をふりながら美紀は走っていった。

まあ明日にでも行ってみようと考えながら俺は家へ帰った。

（後書き）

どうもmshミクネギです。小説を書くのはまだまだ初心者でして
ところどころ説明口調になっていたりと読みづらい面もあると思
いますが、そこらへんは温かい目で見守ってもらえて、そして万が
一にも面白いと感じていただけたならとても嬉しいです。

それではまた他のものでも読者の皆様に目を通してもらえることを
祈りながら小説をこれからも作っていこうと思いますので何卒よろ
しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1034z/>

俺は前世男子だった！？ 01

2011年12月3日22時51分発行